



2018年度 UCD 夏期研修 – 体験談 –

UCD 夏期研修に応募した動機

プログラムに参加する前は、正直に言うとかかなり不安でした。というのも自分は TOEIC のスコアが 400 点台しかなく、英語が非常に苦手だったからです。しかし、カンフォートゾーンから抜け出してみたいという思いがあり、このプログラムに参加しました。内容はというと、僕にとっては非常に良いものでした。というのも、先生たちが、英語が苦手な人にもわかるような、優しい英語で、講義をしてくれるからです。また講義の雰囲気も非常によく、勉強がはかどりました。

日本の学校ではあまりやらない発音や英語のイディオムに焦点を当てることや、自らスピーチやプレゼンテーションをすることが非常に多いため、英語が得意と思っている人でも刺激のある講義なのではないかと思います。 (M1 男性)

私はこのプログラムに参加する前は非常に英語能力が低く、また英語自体に苦手意識がありました。このままではいけないという焦りもあり、思い切ってこのプログラムに参加したのですが、行った当初は相手の英語がなかなか聞き取ることが出来ないと行ったことや、昼食を食べにレストランに行っても、オーダーをうまくすることが出来ないなど非常に苦労しました。しかし、一月の間英語漬けだったお陰か、簡単な英語でならある程度コミュニケーションを取ることが出来るようになりました。また、今までは英語を話すことに忌避感がありましたが、アメリカに行くとそんなことはいってられず、結果、忌避感自体はかなり薄れました。

しかし、まだまだ専門的な会話ができるレベルではないので今後も英語学習をやっていこうと考えています。 (M1 男性)

研修プログラムの内容について

2018年8月22日～2018年9月19日までアメリカ合衆国のカリフォルニア州デービス市に滞在し、カリフォルニア大学デービス校に約1か月間通いました。講義は4つのタイプに分かれており、英語のイディオムを勉強するもの、発音の仕方を学ぶもの、プレゼンテーションにおける基本動作を学ぶもの、そして研究のプレゼンテーション資料作成について学習するものがありました。これらの4つの講義からなる一連のカリキュラムによって英語でのプレゼンテーションスキルを高めることを目的としています。また、この期間に授業以外の課外活動にもいくつか参加しました。企業訪問では、DMG 森精機株式会社のデービス工場を訪れ、遠い異国で世界と戦う日系企業の活躍ぶりを目にすることができました。また、ワインの生産地で世界的に有名なナパバレーを訪れ、日本では馴染みのない産業に触れることができました。現地の学生との交流としては、大学の日本語クラスの生徒とレクリエーションを行うなどして交流を図りました。

そして、2018年9月19日～2018年9月21日においては、サンフランシスコ市を訪れ、カリフォルニア州立大学パークレー校、サンフランシスコ校に行き、そこに通う学生とディスカッションをしたり、日系人の学生と交流を行いました。また、株式会社ソニーインタラクティブ、エンタテインメントを訪れシリコンバレーで活躍する日本人の話聞くことができ、スタンフォード、大学ではアップルやグーグルといったグローバル企業で働く人たちの有意義な話を聞くことができました。 (M1 男性)

研修で学んだことについて

研修中は毎日4つの授業を受けました。それぞれに関して、1限の Public Speaking Skills に関しては日本人が直面する日本人発音とネイティブ発音の違いや抑揚をつけて話すことの重要性から本当に伝わる英語を学びました。2限の Hot Topics in Science and Engineering ではテクニカルな英単語を英語で説明することで自身の研究に使用する単語の理解を深めるとともに活用に関して学びました。3限の Workshop for Professional Presentation では実際に日本で使用しているプレゼンテーションを英語に直したものを発表し先生から講評や改良点に関してのアドバイスをもらい実際に海外での国際学会などで使用できるプレゼンテーションについてを学びました。4限の Listening & Pronunciation in Technology では英語の発音に伴う舌の使い方や協調部分について学びました。(M1 男性)



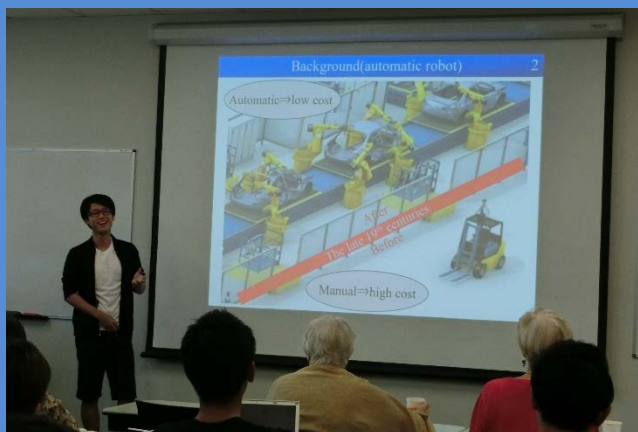
キャンパス風景

学院生向けの留学プログラムとだけあって、単なる語学研修としての留学だけではなく海外での国際学会を想定した英語を活用したテクニカルなプレゼンについて学べました。

自身の研究分野に近い専門家向けの発表方法だけではなく他分野の人にも自身の研究内容を英語で分かりやすく説明する方法や発音、イントネーションの工夫など日本にいる中では想像しなかった苦労や難しさを感じるようになりました。デュークス校での授業全体としては主にパワーポイントを活用したプレゼンのテクニカルな内容について学びました。

その他にも英語を話すときの発音のルールを知ることができました。知り得たルールは3つです。「単語を発音するときのルール」、「文章を発音するときの音の高さの推移」、「アメリカ人がどうやって呼吸を置いているか」でした。

文法的に正しい文章を話すだけでは不十分で、1つ1つの単語を完璧に発音しても不十分。さらに自身が強調したい内容の直後に一呼吸置くことで、直前の単語を強調できることを学びました。日本人の英語教師では文全体の発音についてまで指導する教師の数は多くありません。アメリカ人の講師が「日本人の英語教育は日本人教師が教えているせい、あえて日本訛りの英語の方が、正しい英語よりも日本人にとって分かりやすいこともある。」と話していたのが印象的でした。一度発音のルールを理解してしまえば、ルールは実に簡単で、例外は少ないです。日本の教育でも文全体の発音ルールの教育を取り入れた方が良いのではないかと感じました。(M1 男性)



学習成果を詰め込んだスライド発表の様子

授業の形式はプログラム参加者をふたつのグループに分け少人数体制で行われた。授業は日本の大学での授業の雰囲気とは異なり、ラフな雰囲気先生との距離も近く、非常に過ごしやすい環境であった。少人数体制であることもあって、先生が一人一人に目を向けてくれるため、わからない時などはしっかりサポートしてくれてとてもよかった。

わたしは特にリスニングが非常に苦手であるため、どのように英語を聞き取ったらずらずらと相手の言うことが理解できるのかわからないまま聞き取ってしまい、結果ペラペラと喋るネイティブの人のペースについていけなくなり、まったく聞き取れず相手が何を言っているのかわからない場面が多かったが、周りが英語だらけの環境で過ごしていると、自然とよく使われるフレーズや単語などが慣れてきて、頭で一つ一つの単語の意味などを考えなくてもスッと意味が理解できるものが増えてきて、研修の最後のほうでは前よりも相手が何を言おうとしているのか分かるようになる場面が増えてきた。また自分がしゃべる時も、こういえばいいんだというようなフレーズを学びながらしゃべることでコミュニケーションがより図れるようになった。

(M1 女性)



日本語交流会で扇を一緒に作りました

サンフランシスコ研修で学んだこと

このプログラムを経験する前は、どこかの会社に入ってそこで一生を過ごすのだろうと漠然と進路を考えていましたが、現在は様々な選択肢があると考えています。会社に入ったり、博士課程に進学したり、はたまた自分で起業してみたりです。会社も日本に限らず、語学能力をあげれば海外の会社も選択肢に入ると考えています。このように考えるようになったのは、シリコンバレーなどで様々な人の話を聞いたのが大きいです。

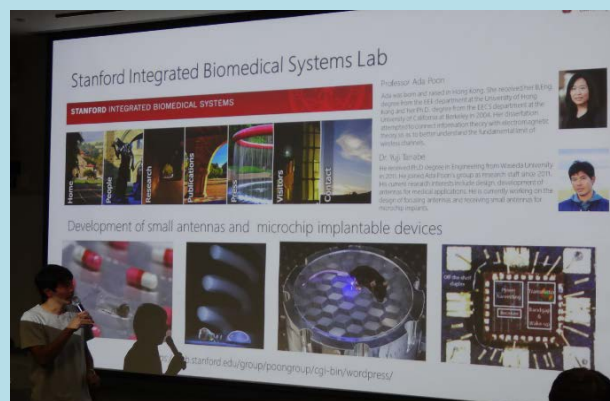
スタンフォード大学の教授は「新しいことを始めるのに年齢は関係ない、ただ欲を持って」とおっしゃっていて、その言葉に非常に感銘を受けました。また、向こうの学生は、大きな会社に入らずベンチャーで働きたいと行っており、そのような生き方があるのかと驚きました。

(M1 男性)

サンフランシスコ研修ではソニー初のベンチャー企業であるテイクオフの代表である石川さんの話を伺う中で、将来のキャリア形成に関することや日本文化、日本の就職環境とは異なる環境であるアメリカのキャリア形成について知ることができ今後の就職活動のためにとても有意義な講演であったと感じています。

スタンフォード大学での講演では日本と諸外国における博士課程の扱いの違いや就職に関する内容を聞き日本にいる中では考慮にも上らなかった博士課程進学の魅力や意味などの知ることができました。

(M1 男性)



サンフランシスコ研修で行われた講演会の様子

元々、海外で、働くことに興味はあったが今回の留学を通してますます気持ちが強くなった。それは特にサンフランシスコ研修での体験が大きい。サンフランシスコ研修では実際にシリコンバレーで活躍されている日本人の方の話 を聞くことができた。中でも株式会社 ソニー・インタラクティブエンタテインメントで聞いたテイクオフポイントの石川さんの話は印象的だった。日本には歴史的、文化的な背景によりいまだに年功序列という制度が残っており、成果をいくら上げてもそれに見合う正当な評価が得られない環境がある。一方、アメリカは実力がものをいう社会であり、努力すればするほど報酬が与えられる国である。石川さんは人生においてその時どう動けば自分の存在価値を一番高められるかに重点を置いていた。自分を一番買ってくれる環境に身を置き、自分の持っている最大限の力を発揮することが重要だと。その話を聞いているうちにだんだんと自分の思い描く将来像が見えてきたように感じた。まずは自分の能力を見極め、足りないスキルの向上に努めたい。そして、まだまだ英語という言葉の壁もあるので、日本での継続的な学習によってこれも併せて克服していきたいと思った。

(M1 男性)



サンフランシスコで働く日本人の方の話を聞いて人生で一度はアメリカで働いてみたいと感じた。理由は特にアメリカでは日本と違いとにかく失敗を重ねて成長するという積極的な考え方や、働く人たちが本当に自分のやりたいことをやる場所として仕事場に来ているためにモチベーションが高く、アツク本気で仕事をしていると聞き、自分もそんな環境で本気で楽しみながら仕事をしてみたいと感じたため。だが自分はやはり日本も好きであるため、日本企業で海外の部署を持っていたり、海外研修ができる場所など、日本と海外の懸け橋となるようなところで働いて世界の動きを見てみたいと感じた。また将来自分で起業してみたいと考えていたが実際起業している人の話を聞いているとそこまで特別な才能が必要だけでなくまずはやるか、やらないか、そしてどこまで全力になれるかが大事だと感じた。

(M1 男性)

研修を終えて得られた心境の変化



私は、英語を話すことの苦手意識を払拭すること、考え方の幅を広げることを目的に理工系大学院生のための海外研修プログラムへの参加を決めました。参加費用は55万円と学生の私にとっては少し高い投資でしたが、昨年同じプログラムに参加した先輩と話し、とにかく行動することが大事だと思い、親に借金をして参加しました。

アメリカでの4週間の留学を通じて、自分も英語を使って外国人と意志相通が出来るんだという自信を得ました。私は、今まで英語が苦手で、英語でのプレゼンテーションはさることながら英語圏を旅行したことすらありませんでした。初めは英語を話すことがとても苦痛でしたが、一カ月後には自分から積極的に英語で話しかけていました。これはこの留学を通じて、間違った英語でもいいからとにかく発言すればなんとか伝わるといった自信がついたからだと思います。また留学を終えて、努力次第で海外で働くことも可能だと考えられるようになりました。今後、このカルフォルニア大学デービス校の授業で学んだことを意識しつつ、英語を使う機会沢山作り、海外勤務が可能になるよう頑張っていきます。

私は、前のめりでこのプログラムに参加することで、目的だった英語を話すことの苦手意識の払拭、考え方の幅を広げることができました。このプログラムに参加することの成果や意義を決めるのは“あなた”です。少しでも興味があるなら是非参加し、夢を広げてみてはいかがでしょうか。(M2 男性)

研修中にアメリカで働く多くの日本人に出会った。幅広い年齢層であったがそのほとんどの人が私の目には自分の目的を持って行動し多様性を認める「カッコいい大人」に見えた。そして彼らの多くが自分から働きかけることの大切さや面白さを教えてくれた。私はその話にとっても感化され、私も自分が今やりたいと思っていることをそれが実現可能かどうかに関係なくとにかくやってみようと思うようになった。直近では就職先を自分の行けそうなところに絞らないようにしたい。

またその後の進路に関しても自分のしたいことを積極的に選んでいき、それが日本よりも海外で実現しやすい場合は海外での活動も十分視野に入りたい。そして、それを可能にするために今後も英語の訓練を続け、海外の文化や考え、現状に対する理解を深めて行きたい。

(M1 男性)

現地実際にアメリカで勉強している学生とのコミュニケーションを通して、PHDの取得を考えていることや日本の学生よりも自分の意見をしっかり持っていること、またその伝え方やしゃべりのうまさなどを実感した。それを通じて自分は様々な事柄についてもっと自分の考えを持ち、それを論理的に伝える方法を練習する必要があることを実感した。またアメリカのシリコンバレーなどで働いている人の話を聞くことを通じて、日本とアメリカの働き方の違いや働くことに対する考え方の違いや環境の違いなどをひしひしと感じた。改めて自分のこれからのキャリアを見つめるよい機会となり、グローバルに活躍できる人材になりたいと強く思うようになった。

(M1 女性)



より詳しい体験談の内容を知りたい方は[こちら](#)をご覧ください